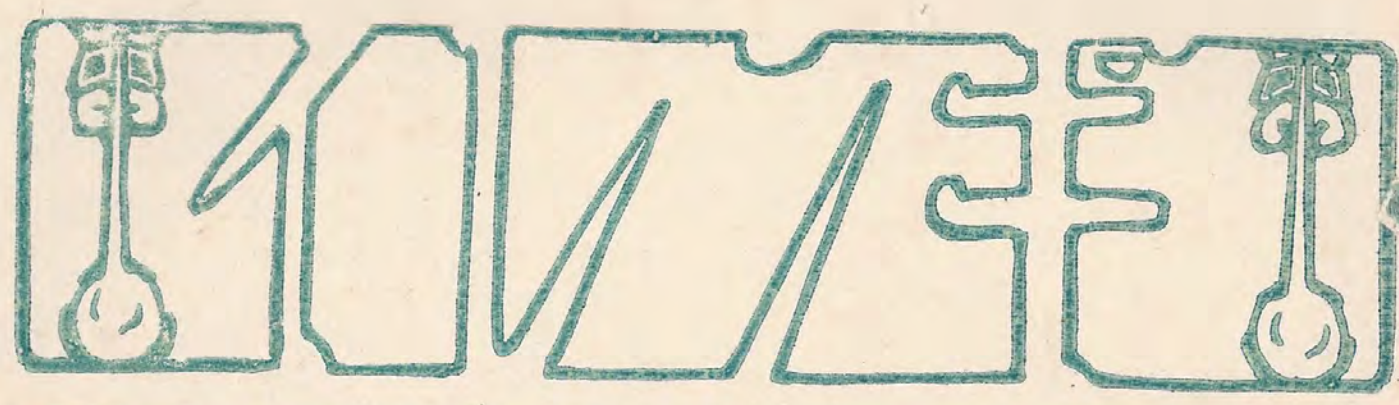


明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可  
銀鈴第拾參號、每月一回二十日發行

明治三十九年六月十八日發行



第拾參號



銀鈴第拾參號掲載目次

禁 轉 載

表紙繪	杉浦朝武畫 岡本豊陽刻	花 (俳句)	千江選
素 謠(長詩)	有松曉衣	落 椿(短詩)	牧岡けい子
五分間(小説)	はつなつびと	新聞紙を讀む心得(雜文)	李 村
春 風(俳句)	梧 月 選	小 評(批評)	三十六峰生
紫 淚(短詩)	七 星 等	新 調(俳句)	枯竹等
春圃雜筆(雜文)	千代延春圃	すみれ會(俳句)	
壺 (俳句)	羽 風 選	湖音會(俳句)	
ひつじ草(短詩)	ましの翅白	編輯局より	
獨斷錄(雜文)	今 道 人	控え帳(雜文)	
白 鳥(短詩)	支部詠草	寄贈新刊	
愛 犬(小品文)	綠 山 人	京の客(長詩)	野 花

銀 鈴

第拾參號

明治三十九年六月十八日發行

素 謠

有松曉衣

みたび木室の  
頬にほふ鳥は  
羯鼓はうたず  
ただ見てありぬ

洞を出でよ  
花をくぐれど  
笛をも吹かず  
野火の面を

ちひさき影の  
片羽萎へたる  
棘のかげに  
戀ぞ責苦と

過ぐと見しは  
鶯ども見えて  
痛敷く夜は  
寝わび啼くも

いま朝明の  
野火の蓬ろ火  
天星消ゆと  
さて消ゆらしや

峰蔭暗らみ  
風たつままに  
地にも消えて  
鳥が戀の

想ひは雲と  
羽並めそよるに  
高へも翔くる  
風が素謠ひ

嶺をしつたひ  
光を戀ひつ  
梢のうたげ  
静けかるよ



五分間

はつなつびと

白襟に格子縞の、た太誠結び、からころと馳け出て玄關脇、冠木門の内から

「兄さんー」

盗車の走るのさへ心急いで、實にや千秋の思ひもした母が急病よとの電報に接し、寄宿舎の窓から飛び出した限り、ついこの停車場より、一二丁しかない我が家だけれど、牛の歩みの心地に堪へず、嬉しや歸つたと思ふ矢先き、可愛の妹が迎へて呉れて

「遅かつたわ」

「はつ」

「兄さん、残念よー」

抱き附いて潜々と、今五分間も早かりせば、生きてるうちの母に一言(清が歸つて参りました)と。嗚呼ー。眞夏の日は恰度午過ぎ、丸に照つて地上に照つて、日光りする暑さの中、我等は抱き合つてわつと泣いた。門外の柳門内の松に、蟬がジイ〜鳴き交はす、醫師なる人は應揚に「さらば」と云つて車に乗つた。心無の

紫 涙

七 星 子

紅の浪木すげ風する山あいの家にやどりて君をおもひぬ

たはむれに見てもかはせな寝ねがての衣につゝむは美はしき珠

愛らしき小鳥のやうに怨言をこことなく云ひぬかもはれ人は

鯨の齒の白きが下に珊瑚とる人こそおもへ磯をし行けば

内 田 枯 竹

菜の花は窓にせまりて二反の出より吹き來し春の風かな

菜の花や川を隔つる山吹の黄なる眺を人ほめにけり

松 田 松 葉

春の夜やれもふに君はかかる時かかる戀もわづらひまさむ近江路や梅に鋸する老人にもものまなびする

人々よ、神は我等を奈何にか成さんとすまむ。

春 風 (募集句) 梧 月 選

春風や明放ちたる濱館 峰 秋  
春風や早き百合見る麓道 竹林坊  
ほろ酔の車に眠し春の風 琴 月  
春風やふりみだしたる洗髪 尙 鬼  
帆を上げて船川に入る春の風 五 春  
春風に羊の糞のちらぎけり  
春の風幣の敷吹く廣田かな  
磯際に舟底焼くや春の風  
高臺に喇叭なるなり春の風

天

春風や嘉儀に参する新袴 五 春

▲前號募集短歌課題戀ならす遠く袂を分ちにける男(女)に代りては、課題の不適なりしためか応募数少く且つ佳作無かりしにより發表見合せとせり(銀鈴社編輯局)

旅の君かな

灌佛やきざはしくだる七人のみけさ返して

かく朝の風

木蓮にあめ降る日なり所花寮や若き僧よぶ

ねんけはひかな

ねばろ月南の椽に我よびてものいふ人をに

くむと云ひぬ

藤 本 晚 花

きぬぎぬや紅帯べる曉星とみ胸をさしてもの言ひし人

千 代 延 春 圃

文箱解き齋被にそへしくれなみの女文字見る臆夜なれば

れん神の怒りましてか雲裂けてノアの日の

ごと大雨するかな

春の海安きねむりの稚兒に乳をそへたまふ

のどけさに似る

竹 林 坊

女云ひぬ心いたらぬ身なればに忘れたまひしなづかしき君



春圃雜筆 (二) 千代延春圃

▲日章旗に就て

我國で日章旗を用ゐられるのは古いことである。之を  
旗に着けたのは、文武天皇の時に見え、旗に書いたのは、  
後醍醐天皇の時に見えて居る。續日本記集古十種  
に徴して見るとわかる。其他軍屬等に圖したのは、諸  
書に見えてゐる。而して日章旗を國旗と定めたのは、  
近く安政の初めなのだ。之は一般國民が大に知らざる  
を得ざる事なのだ。

安政元年甲寅七月

大目付 江

大船製造に付而者異國船に不紛様日本総船印者白  
地日の丸職相用候様被仰出候且又  
公儀御船の儀は白紺布交之吹貫帆中柱へ相建帆之  
儀は白地中黒被仰付候條諸家にかゝても白地は不  
相用遠方にても見分候帆印銘を勝手次第に相用可  
申候尤も帆印並其家之船印をも兼而書出置候様可  
被致候右大船之儀平常回米其外運漕に相用候義  
勝手次第に候得共出來の上者乗組人數並海路乗筋

つよき事言ひて分れし一瞬の昔をなけるよ  
はき身なれば

象の背に笛もてあそぶ南洋の椰子の木蔭に  
また君想ふ

菅原まさむ

眼と眼其瞬間にして我が胸は花の大なる一

輪を得ぬ

わん胸の血潮到るやみ文とれば刺掛わが手

にせまるれののぎ

河野翠 漱

夏花の中に在せりあめつちに二なきかた  
と相愛びとは(東岳の君にとて)

大屋左一

わがために鼓は敲はれて先立つと泣きし日

線りぬ初夏の風

道守は牢屋やぶりの相ありと通行る否みぬ

夕時雨かな

わが胸に萎まぬ華の傍を夢のご見ぬ若木

立かな

運漕方等猶ほ取調可被相伺候

右之通可被相觸候

安政六年己未正月

大目付 江

大艦には御國總付日の丸職相立

公儀に而は中帆の柱へ白紺布吹貫引揚帆は中黒相

用候積先年相達置候處向後御國總印は白地日の丸

之旗艦綱へ引揚帆は白布相用

公儀御軍艦ば中黒之細旗を中帆柱へ引揚世間諸家

に於ても大艦出來次第家々船印

公儀御船印に不紛様取調難形を以て可被相伺候

右之通可被相觸候

此外、日章旗のことは萬延元年庚申十一月六日と、文  
久三年癸亥八月の布令に見えてゐるから、茲には畧す  
萬延元年北亞米利加合衆國へ使節發遣の際渡航せし、  
御勘定組頭森田尚太郎の航海雜詩に、  
東方相去幾千里。獨立船頭拜旭旗。  
といふ句がある、參考すべきか。

▲飲食物名と佛閣

世俗一般、飲食物に肉を用ゐてないのを精進料理とい

つて居るが、其羹汁にけんちんちやん(東京にてはけんち  
んといつてゐる——建長の字)といふのがある、是  
は元鎌倉の建長寺から創まつたので、世人がかくいふ  
さうである。また外に金山寺味噌といふがあり、寒製  
の糯米粉に観心といふがあり、道明寺粉があり、座禪  
といふ豆の羹たのがある、隠元豆といふがある、是  
は隠元和尚が持つて歸つたのであろう。凍蕎麥は、善  
光寺凍豆腐或は高野豆腐の如く、また醃菜類の澤庵は  
澤庵和尚の新發明であるかも知れない。尙穿鑿せば幾  
らもあるだらう。然し僧侶と佛閣と菜食とやうに考へ  
て見ると、此種の人に依つて、發明せられ、傳へられ  
たる物が多いのは怪しむに足らぬ事ではある

壺 (募集句)

羽風選

日あたりの灰汁つばに散る櫻かな 竹林坊  
捨壺に溜りし水の温みけり 尚鬼  
山吹や缺けたる壺に雨がふる 美童

天

壺焼の火の粉とびけり松の鉢 五香



ひつじ草

ましの翅白

天上の宮居に侍り、篋候ききて夢みる心地、櫻日和は胸の扉は紫摩黄金の彩羽もて彩らむとも、或ひそめきや永却に人は思はじ南洋のパナナの香する嶋にまろびてさりぎしや尖塔たてて大濤に鷗むると君も招せむ現なく花守る晝よ翅生ひて思ひの弓に君を射てまし隠り沼の羊草なり白き花かほるままにも思ひもえけるげに天びどの羽袖に抱かれて、わがこころ夢みることとき春の晝。いかなればわが小さき胸、かくはわななくか、あなまどひぞふかし。花の香に魂こそゆらげ、うましあこがれ。そもひつじ草の、眞白にもゆるに似たるまどひなれ。かほるがままに、胸こそねざれ、れもひいともきよらに。

懸賞俳句第二回課題

△若葉 十句 梧 月 選 △蝸牛 十句 羽 風 選  
△締切孰れも 六月三十日 △投稿 稿 本社編輯局宛

分の手に合ふた事は肉体的労働をやるがよい、精神の慰安は向ふからやつて来るのだ。見月飼くこと、のきらひなものに煩悶だなど言ふ事が起つて来るのだと思ふ。荒村が言つた様に當分の女學生などにも二三年は下女奉公をやらせるがよい。そして心棒強く、手でやる事が出来る様になつたらうまいものだ。△それでも人生問題はさうするかこれが解決せられぬ内はなごいふものもあらう、言ひたいものには言はして置くさ、まあこつこつやつて見たまへ、たしかに其内に人生の眞趣を味ふことが出来るから。△世の罪惡、他人の言動そんなものを見つめてはいけぬ。見つめるから色々の者が起るのだ。うちやつて置きたまへ。彼等もいつかは悔改める時が来るよ。未來がない、神がない、佛がない、さうでも言ふものには言はして置きたまへ。善因善果惡因惡果だなんてそんな事があるものか、悪い事は自然も、善い事は仕掛だといふものには言はせ置くさ。自分は白く彼は彼だ。無利やり自分の考に引き入れやうとするのは或は間違ひかもしれん。唯自分は自分の言ふだけの事をいつて其結果を早く求めやうとあせつてはいけぬ。

獨斷錄

今道人

△此頃最も青年の間に論せられるものは人生問題であらう、曰く人生とは何ぞや、我とは何ぞや、人生果して生くべき價値ありや否や。そしてこれが回答としてあらはれた書籍雜誌、あるはあるは、富士の山ほごある。けれど創見と見るべきものは一つもない。廣告にかぶれて買つて見るとイヤハヤねへそがやごかへをする。甲論乙駁はてしがない、そこで定見のない學生はそんな行つまつてしまふ、そして藤村操や、某々のまねどしやれて見るどうも困つたものだ。△何も人生が不可解だとして死ぬるにも當るまい、死んだとしてそれで解決がつくのではなし、それよりは修養々々釋迦や、孔子や、基督や、老子や、ソクラテスや古來最も人口に膾炙せられた大偉人の事蹟、言行を靜かに考へて見るがよろしい、忽然として悟る所があるであらう。

白鳥

一 松江支部詠草

並み懸る星と船なる灯と照りぬ靜かなる夜の天地にして 福間 如 澗  
春に似し人もる遠き夕雲の空をも思ひ日もなつかしき 三島 溪雲  
相見てはいふに言はぬにすべしやすあやしきまゝに戀成りにけり 舟木 波 秋  
瑠璃鳥の翼と春も日和し霞へだつる遠山ながら 中津 峰 秋  
たどれば眞珠に似たるねん眸とこわか草のやさしくもあれ 坂本 笑 風  
恨むに君には春の若ければねのづからにも身を賣めてける



立石 洲洋

春の日や君もぬませるふんうたげ  
蠻奴が國もさながらぞよき

やごとなの黙示に胸の開けては樂もほがら  
に鳴り出でぬべき

二 濱田支部詠草

河野 素陽

夢に見る海のさましてうす霞せまるをめで

ぬ君とならびて

紺青の光みなぎる蒼穹に寶塔うかぶわがれ

もひかな

後藤 孤星

春の山かすみよぎりぬさながらに白狐半て

もく魔の焔かな

のたまひぬ「誓たがへし醜國の怪鳥に胸はよ

し食まるとも。」

森脇 桃村

花あかり木かげを洩れて白玉の宮に侍する

と酔ひぬればる夜

君が家はうす紫に躑躅さく小山を右に白樺

のもと

雨する日玉琴つくる連翹は黄金の弦にのせ  
ぬ春の譜

松本 掬雨

繪すだれに白光れびて月さしぬよりて立た

せる君が黒髪

白裳して若葉のかげに月めづる天女ぶりな

り白隣の花

増野 翅白

うつくしき詩人よ君よ琅玕の宮に侍りて湖

讀ふことや

初夏風きよらにすきて濃き藍の湖に棹さす

君れもふかな

たへます湖の透宮白鳥のいねむる春の夜

をこひしむ

▲懸賞俳句第三回課題

△蝙蝠十句 羽風選 △締切孰れも 七月二十日

△百合十句 梧月選 △投稿 本社編輯局宛

懸賞讀者募集

一 雑誌の主義を普及せしめんには、先づ多くの讀者を得ざるべからず。讀者あり而して初めて雑誌は刷新せられ活動せらるべき。我社は其創立より一貫の主張に基づき、第十三號發行の盛運に到れりしを歡ぶと雖も。今や一段の飛躍を要する時となり。計畫する所亦尠しとせず。然れ共、讀者の數今の如くんば、今後に於ける本誌革新の程度も恐らくは從來の圏域を出でざらむ。是我社が頗ぶる遺憾とする所なり。依て爰に讀者募集の新案を設け、次號以下漸次本誌の改良を試みむとす。四方熱意の同志希くは輔けよ。

方

法

- 一 「銀鈴」半ヶ年分參拾錢以上前金拂込者には番號券壹枚を呈し同時に社友に列す
- 二 前項拂込者五名以上紹介者には、五名毎に番號券壹枚を呈す
- 三 番號券は切手若くはハガキにて請求せられなば豫め各自の番號を知り置くことを得べし
- 四 申込期限は七月三十一日限とし八月の全誌上第十四號に當籤の番號を報告す
- 五 當籤者を定むるには松江市内發行松陽新報社若くは山陰新聞社の何れかに抽籤を囑托し之を決す
- 六 百五十番を以て一組とし一組毎に左の賞品を附す
  - 一 等 國內發行の新開紙(歐字新聞を除き)一種三ヶ月分 五等 文藝俱樂部 一冊
  - 二 等 全 二ヶ月分 六等 新小説 一冊
  - 三 等 全 一ヶ月分 七等 文藝界 一冊
  - 四 等 全 一冊
- 七 賞品は時宜により現金に換ふることあるべし

明治三十九年六月

石見國邑智郡田所村

銀鈴社

社

責任者

河野翠 大原紅雨



愛犬

緑山入

「シヨントよ。」  
尾を捲いて従ひたる愛犬シヨンは、余が立ち止まりたる刹那、何を探し索むる如く、余が左方森林の方に走り去りぬ。

「シヨントよ。」  
重ぬて余は彼を呼びけるなり。さほれ如何にかしけむ、彼は早や遠く、轟々と生ひ繁りぬる杉木立の中に入りて、再び余の呼聲に答へざりき  
伯母なる人を訪はむとて半里ばかりの山道しける日なり、こは余にとりて終生忘れ得まじき、隣なる、げに思へば痛ましき事實の出で來し日なりけり  
友よ、余は、彼が余の亡き姉が戀しみ飼へりける忘れがたみのひとつなるを思ひ出で、は、早や余の有りしゆゑよしを語らばむ勇氣さへなきを容したまへ。  
シヨンはげに歸らざりしなり。何ものにかかごはかされし、あらずば、自から死を決して、かの深緑いと濃かなる森林の奥、どこしへに秘密抱くらむ湖中に投じつるならむのみ。

花 千江選

華吳座や尻おちつかぬ花の下 波 舍  
奥院の朱塗剝けたる櫻かな 南 翠  
本尊は黄金佛の櫻かな 紅 山  
翠簾を垂れて捲かざる櫻かな 東 岳  
講人の花咲く頃を集ひけり  
揚弓の的あざやかに櫻かな  
園丁の蓑に花吹く小雨かな  
かしや札櫻のかひにまれけり

落椿

ぼとゞぎすあざみ一聲西さりぬ待つ人れそ 牧 岡 けい 子  
さ短か夜のまど  
ぼとゞぎす春のうれしき一の夜にさびし緋  
のきぬ裂くひびきして  
去年も聞き 育も聞かむほどゞぎすぬれて  
君待つ卵の花かげに  
夕闇を落つる椿のさびしらに審判の御座も

さらば、いかにして彼は死にけむ、いかなれば再び余に、涼しき目、柔かき毛、愛らしき鳴聲をば、示さうんごはしけむ

友よ、彼は深く主人を慕ひ、長に柔順なりしなれども、世の人は、彼を狂犬とよびぬ。死せる前の日、なにがしといへる大盡の愛児噛みけるをて、既に早や殺されんとせりし折、通りかゝれる余の、強ゝての顔みゆるされて連れ歸りけるに、余はいたく彼を懲し彼の又柔順なる昔しに歸らんを望みたりしが、あはれ、彼は、いかにか感じ、いかにか愧ぢたりけむ、終に自ら死して、余に罪を謝し、併せて世の人々に永き別れを告げたりしなり  
友よ、彼はいま、水緑りに、若葉めぐれる湖底にありて、安きうまののうち、涼しき目、柔かき毛、愛らしき鳴聲を、樂しき永却の世界に運び、絶えず余を待ちつゝぞあらむ。  
シヨントよ、汝が安息は、げに永久なり。さほれさびしき晨夕の余が、汝を戀ひ、汝を慕ひ、汝をなつかしむ心根憐れと思へよかし

思ひて泣きぬ 見まさずや君戀ふ胸にひしくと鬼のやうなる人のせめぐを

新聞紙を讀む心得 (二)

△四百の新聞を讀むべし、紙面廣闊に過ぐれば、却て  
△多忙の時は、二面雜報だけ見て置くべし。  
△紙の欄の設けなきか、又は新聞の記事凡庸なる新  
聞紙は見るべからず。是、情趣活潑せる新聞のみ在  
△新聞の善るが故に、讀むを毒するべし。温  
情に欠けたる人ごは如何の顔になすんば、温  
△編者の注意すべし、粗野なるに於ては、即ち  
記者の老成なるより活氣あるものを擇ぶべし。老成  
の社説は老成なるが如しと雖も、或は時代に後なるの  
廣れあるべし。如しと雖も、或は時代に後なるの

(以下次號)



小評

▽吟月君の言の如く實際島根には島根調なるものがある。その中でもわが銀鈴はまた銀鈴調とでもいふべきか一種特異の格調があることもふ。

前號短詩中で、三郎君の「みつしは」のうち、「椿の戸」「えもわかぬ」それから「魚ねむる」「八瀬の女」「花笠や」など凡べて優しい歌とれもふ、合作のやうにしてあるが恐らく同一人の作がらう、果て何人かは知らないが、拾號に於けるものなごより見ると餘程進歩せられたやうだ。

眞木柱では、藤本君の「永久に」小笹君の「みちしほや」河野君の「ああ半夜」「ひとたびは」が特に面白いと讀んだ。その他「春雨や海氣」「戀するや」「敢て問ふ」なども亦誦すべきものだと思ふ。河野君の作には久し振りで接した、君はいま新しい方面に向つてあるものを得むとつとめて居らるる様だ。  
みだれ華の中では、森脇君の「花燈に」松本君の「春月や」増野君の「玉輿」になごが先づ面白いかと思ふ、増野君は想の人にあらずして技の人の様だ。

すみれ會 (出雲、杵築)

桶の輪の流れもあへず水温む  
そより立つ九輪の塔や春寒し  
仰ぎ見る陽明門や風光る  
面會の名刺も永き日なり覺  
陽炎や石ころ多き山の寺  
蝶々とお宮詣での肩車  
春かせや海岸筋を馬の旅  
草萌を雞走る小寺かな

彫影

松葉

湖音會 (出雲、乃木)

眼病の癒えて白桃咲きにけり  
草原に風のみなりや日暮れ覺  
白桃の實を結ばざり古き株  
ふらこゝに竹馬の武者集ひ龜  
菜の花に幟の多き野宮哉  
池堀つて治水の策や夏隣り  
近郊に雉子の聲や夏近し

笛杖

波秋

如舟

峰秋

笑風

洲洋

同

最後の大屋君のうすあを衣中では、「二十五年」いそがしうが白眉だ、君の作の中には、稍々古いではないかと思ふやうな想があるは惜しむべしだ。

尚ほ全牒を通じて、及び一人々々の作風に就て云ひたいこともあるが、こゝには只前號に於ける所謂銀鈴調を代表すべきものを擧ぐるに止めた。(三十六峰生)

新調

夢寒きテントの上や歸る雁 枯竹  
湯炎や軍旗を祭る劍の先  
紅梅や髪を切りたる未亡人  
三月盡木の芽漸く胡地の春  
春の雨伽羅の煙の行方かな  
山吹の垣に傘干す日和哉 神の子  
田代りの佛性者が來りけり  
彼岸會や島へ棹さす女ぶね  
緋桃さく寺の垣根や白き鶏  
幕曳けば櫻はら／＼零れ覺  
乳母が家の春戸は蕃花豆の花  
接木する手元に呷る小蛇かな

編輯局より 大屋生

▲本號から表紙繪を改めました。これは、畫伯杉浦朝武氏が特に本社のために彩管をふるはれたもので、彫刻は、當時東都で有名な岡本豊陽氏の手につれたものであります。ここに二氏の厚誼を謝し、併せて皆様を紹介いたします。

▲別項廣告にもある通り、懸賞をもつて讀者を募集することにいたしました。利益をもつて讀者を引きつけやうといふ様なことは文士として採らないとのおしかりもありませうけれど、雑誌を維持する上に於て、實に止むを得ぬことでありますから、社中同人の微衷をね察し下さつて精々御勧誘下さるやうに願ひします。

▲ごうも皆様の投稿が、長詩、短詩、俳句等韻文に編してゐますので、随つて「單調な」などの評も受けるやうになるのです。小説なり、美文なり、評論文なり、文藝のあらゆる方面にわたり研究して健全なる發達をしようといふのが、本社の希望でありますから、これ等何れの方面を問はず、ごしどし投稿して下さい。或は紙面の狹隘なために投稿をね見合せになるれ方もあるかも知りませぬが、價値ある作物に對しては、紙



控帖

面ををしんで掲載せぬやうな、ケチな考はもつてゐませんから、御承知置き下さい。

▲本誌は毎月二十日發行する筈でありますのに、五月は遂に發行することが出來ず、讀者諸氏の冀望にをむきましたことを謝します。辨解のいた事は申しませぬ。

▲次號より短詩の選者を東京の有名なる某詩人に依頼することにしました。

▲次號は六月末日を以て投稿を一切せず、編輯の都合もありませんから、期日までに必ず到着する様に御發送下さい。

▲本誌に對する批評は、最も歡迎する所です。唯漠然と編輯が調ふて居るとか、或はマジイとか、ウマイとかいふやうな評は喜びませぬ。忠實に、具体的に其長所、其缺點を指摘して下さいならば、將來に向つて改善する上に多大の便宜を得る事と信じます

▲寄贈して下さいな新刊に對する批評は、紙面の許す限り綿密にするつもりです

寄贈新刊

△くちら。三ノ九、休戚と一新せり、趣味ある雑誌なり。△山鳩。三ノ五、六、趣味ある小雑誌。一ヶ月休刊せしは廢刊にはあらずやと氣遣はせたり。花畦といふ人新に入社して編輯にたづさはるといふ。△天龍川。二五俳句は見るべきものなきにあらず。其他は多く駄目也。△五月。紀念號、俳句佳作多し、編輯の引締りたるはうれし。△小琴。九、三十四頁の菊版雑誌なり、所載の韻文評論等稍々見るべし。△イカツナ。終刊號と銘打ちて出でぬ。記者が「四年間各號に自分は編輯使りを書いた、而しこれが最後である」と云へるは評者が殊に同情の涙を禁じ得ざりしものなり。憾むらくは飾られたる内容に於て厩かに有松曉衣、大石霧山の作以外に見るべきなかりし一事にあり。△懸葵。三ノ二美はしき雑誌、和歌は一も見あたらず。俳句は一寸面白く感ぜらる。△ホノホ。二ノ四、夏村曉衣董坡泡沫等の詩、省夢、掬水、曉衣、天評子等の評論を載せたり。地方雜誌界中出色のもの乎。△ベニスズメ。一、明星形三十頁の小冊子なり。廢刊の辞の一節に曰く、「眞美にして

▼講談物は矢張り新聞紙上の一勢力となつて多くの讀者より歡迎せらるるものゝ如し雑誌の賣れぬも道理也

▼品子友史の歌話「明星」に出づ參考となること少しとせざれ共幸ひと樂座落に終らすんばと今より氣遣はる

▼本社々友杉浦武五月の「明星」に繪画夏の日を發表す運筆着色の技中央畫界に於て亦出色の趣きを成せり

▼前號本誌の三郎乙女合作の詩同一人の作なりと三十一六峯生は擁護せり然れ共否なり乙女は本誌の某女詩人

▼最も多作詩人は内海泡沫溝口白羊筒井董坡正置汪洋等四五輩よくも作詩の時間を有するものかなと嘆賞す

▼白藝雜誌といふが出づ商賣ならばこんな馬鹿な雑誌でも出さねばならぬもの乎筆は小川村とか聞けり

▼俳句専門雜誌の多きこと當今の如きはあらずト台同でもしては如何なるものにてや爾う澤山は入らぬと也

▼本社の濱田支那か廻覽雜誌「春潮」が出た翅白桃村が編輯主任で孤星が繪畫の担任、美くしい者だつた

▼前號の本誌和歌輪講を馬鹿々々しいと云つたは聰明なる山陰新聞記者先牛だ成程と同人妙な處で合點した

純潔而して崇高なるものは白骨なり。吾は白骨を愛す吾は白骨を貴ぶ。名を求めず、利を捨てて「文」と「美」のために垢塵以外の地に立つて活動せんとす云々」以て社中同人の抱負を見るべし。願くは健全なる發達をなせ。△若櫻。二ノ四、短篇小説的のものねほし。其他和歌や俳句や少しはあれども何れも感服しがたし△まぶき。一ノ十、例によりて俳句はねもしろく見らる。其他にはとりたてていふほどのもの少し。△五月。三ノ五、△山陰新聞△松翠三ノ三△墨連二ノ五

京の客野花

眉黛として京をだち  
色白、小肌、をんなにも  
欲しきやうなるみめ容姿  
二十四若きまろうごや。  
里めづらなる物がたり  
酒を能う呑みたまうつて  
追分上手一掌をうつて  
満座の花と謳はれぬ。  
明日は桃連さく土手  
乗白ねほき難波びと一  
東にかへり給ふとぞ



# 銀鈴社清規

- 一 文藝を愛するものは何人と雖も本社社友たることを得べし。
- 一 社友は銀鈴誌代六ヶ月分以上前納者たることを要す
- 一 社友は社内同人を経て本誌編輯の議に參與することを得
- 一 社友には有効期限毎月銀鈴を無代配送すべし
- 一 支部社友は本社直接の社友と同一の待遇を受くることを得べし

## 銀鈴定價表

定	價	郵 稅	廣 告 料
一部	金五錢	金五厘	一行五號活字二十四字計貳拾錢
六部	金參拾錢	.....	半頁貳圓
十二部	金五拾五錢	.....	郵券代用一割増

## ▲各種の募集

- 一 和歌
  - 一 俳句
  - 一 小説
  - 一 評論文
  - 一 小品評
  - 一 小品文
  - 一 文壇消息
  - 一 歌會句會の詠草
- 何れも毎月末日べ切。字詰二十四字。  
本社編輯局宛。秀逸なるものは社中同人の議を経て薄謝を贈ることあるべし。

明治三十九年六月十六日印刷  
全 年六月十八日發行

銀鈴第十三號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二

編輯兼發行人 河野 岩 雄

全縣全郡川本村大字川本五百三十八番地

印刷人 原 八太郎

全縣全郡全村大字全五百三十八番地

印刷所 邑智活版所

島根縣邑智郡田所村

發行所 銀鈴社

取次所 安達共榮堂

全 古井圭山房

全 山本芙蓉堂

銀鈴第拾參號(毎月一回二十日發行)  
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可

明治三十九年六月十八日發行